

目覚め

福岡 路子

トオコは、電気の消えた姪の千加子の部屋でしばらく前から横になっていた。仰向けになって天井の二か所を見つめていると、最初は全くの暗闇でしかなかったのが、いつの間にかシーリングライトの周りが青白く光ってみえてくる。今日は、朝からあまり体調が良くなかった。明け方から降りだした雨のせいかもしれない。

最近の分譲マンションは気密性の高い防音ガラスを使用しているからか、駅前だというのに外の音はほとんど聞こえない。枕元のスマートフォンで時間を確認すると夜九時をまわったところだった。

「雨どう？ お迎えにいくか？」

駅向こうの塾に、雨が小降りだからとウィンドブレーカーを羽織って自転車で行った姪の千加子にショートメールを送る。すぐにスマートフォンが振動し、「平気！ ほとんどやんでる。自転車で帰る」と返事があった。十月に入って昼間はまだ半袖でも過ごせる気温だが、夜はやはり冷える。車で迎えに行こうと体を起こしたとき、突然、周りの空気が急に重くなったような息苦しさを覚え、再度横になった。体が強張るのが分かる。右耳からきーんと微かに金属音が聞こえてきた直後、小さな波のような不安感がトオコを襲う。波は折り重なって勢いを増し、心臓の音が耳元で大きな音を立て始め、呼吸は速く浅くなってくる。こめかみには冷や汗が伝い、手足は冷たくなる。トオコはパニックを起こしかけている自分に気付く。

かかりつけの心療内科から、頓服用の安定剤を貰ってはいたが、出来るだけトオコは飲みたくなかった。薬の減りが早いと、仕事に復帰するのが遅くなるのではないかとためらわれたからだ。

トオコは意識的に息をゆっくり吐いて、首をねじって視線を天井から、ベッドの対角線上に移した。そこはまだ闇に沈んでいるけれど、ホームセンターで売られているような無個性の学習机があり、机の横にはパッションピンクのランドセルが掛けられている。そのランドセルにくくりつけられた給食袋の形とその模様がぼんやり浮かぶようになるまで見つめて

いると、トオコは打ち付ける波が次第に遠くなっていくのを感じた。

給食袋は、紺色のきんちゃく袋にたくさん星がちりばめられている。姪の千加子と一緒に百円ショップできんちゃく袋と布用シールを買って作ったものだ。

千加子がきんちゃく袋にシールを貼り、トオコがアイロンを押し当てる。千加子があまりに真剣に星の配置にこだわるから、小さな給食袋を作るのに、一時間もかかってしまった。給食袋の裏には、刺繍で、「CHIKAKO」と千加子の好きなミントグリーンの糸で縫われている。縫ったのは千加子の母の秋子だ。もう、五年も前になる。

この部屋は自分の住んでいた部屋以上にトオコを安心させてくれるもので溢れている。波が過ぎ去り、トオコは、少し前まで部屋で飼っていたカメが水面に出て空気を吸うときのように、そっと息をついた。そのときドアが細く開いてトオコちゃんと小さく呼びかける声が聞こえた。冷たい外の空気をまとい、影がするりと入ってきた。千加子だ。

この部屋の本来の持ち主でもある。姉の子供で小学五年生になる姪の千加子は、中学受験のために、駅向こうの塾に週に三日、夕方六時から九時まで通っている。他の曜日には、英会話と体操の習い事もしていて千加子の毎日は、休職中のトオコの何倍も忙しい。

「ちいちゃん、おかえりなさい」

トオコは、布団の上に起き上がって、明かりをつけようとローテーブルに置いたリモコンを取ろうとしたけれど、それより先にさっと動いた影に、部屋の主電源を切られてしまった。暗やみの中でトオコはベッドの上に座ったまま困ったように笑った。

「おばさん、部屋で本を読んでいたら頭が重たくなってきて、電気を消して休んでいただけなの。だから、電気付けていいんだよ？ お腹空いてない？ お夜食が台所にあるからいっしょに食べる？」

けれど、千加子は返事もせずに、この一年ですると伸びた身長わりに、薄い体に不釣り合いなほど大きな塾用のリュックを机の上に置いた。それから羽織っていたウィンドブレーカーを学習机の椅子にかけて、そのままトオコのいるベッドに乗り上げてきた。弾みでトオコの体が揺れる。千加子がただいま、と言ってトオコの肩に頭を擦り付けてくる。

トオコはベッドの上に横座りになって、千加子の髪をなでた。トオコの髪と違って、さらさらとまっすぐな髪。今は、はっきり見えないけれど、形の良い耳、通った鼻筋、弓なりの眉にまつ毛の密集した二重のぱっちりした目。千加子は、姉の秋子に似て整った容姿をしている。大病をする前の母も美しかった。父親に似たトオコと彼女たちは別の生き物のように

思えることもある。まだ、表情にはあどけなさがあり、頬には子供らしい柔らかな丸みが残されているけれど、五年もすれば完成された美しさを手に入れるだろう。

「学校、楽しかった？ 塾の勉強、難しい？」。

「別に。いつもと一緒に」

千加子は最近、自分のことを進んで話さなくなった。学校で何かあったのか、それともこれが思春期なのか。昔から千加子はトオコに不思議なほど懐いていた。千加子は自分の感情をうまく言葉で伝えられずよく癇癪を起こす子だったけれど、トオコは千加子は何を考えているのかすぐに察することができた。でも、今は千加子は何を考えているのか分からない。千加子はいつの間にか遠いところに行こうとしている。

「トオコちゃんは、何してたの？」

それこそ、トオコは言葉に詰まる。

「ええっと、そうね、今日は、雨が降ってたから車で図書館に行ったの。そこで、昔、家にあった児童書を見つけて、懐しくなっちゃって読んだの。でも全然話が頭に入らなくて、短い本を読むのにお昼までかかった。え、本の名前はね、」

千加子は、トオコの膝の上で、「どんなお話？」「学校の図書館にもある？」「お昼からはどうしたの？」と質問を投げかける。千加子の質問に答えているうちに、トオコの代わり映えのない一日が、何か意味のある一日だったように思えてくる。

トオコは児童用の雑誌や書籍、学習教材を扱う小さな出版社に勤めていたが、先月の終わりに体調を崩してから休職し、姉の家で暮らしている。

仕事中に急に目の前がぐるぐると回りだして、吐き戻しをして立てなくなって、同僚に救急車を呼ばれた。倒れる直前まで、トオコは自分が駄目になりつつあるという自覚がなかった。なので、点滴の最中に医者から、

「特に身体的な異常は見つかりませんでした。ストレスでしょうね」

と言われたとき、トオコは首を傾げた。確かに一緒に隔月誌を担当していた派遣の女の子が急に辞めてから人員の補充もなくトオコはほとんど寝る暇もなく働いていたし、トオコが任されたのは、廃刊がほとんど決まっている雑誌で、気苦労が絶えなかったけれど、それで体調を崩して仕事が出来なくなるほどストレスだとは感じていなかったからだ。

そういえば倒れる少し前に飼っていたミドリガメを外気温が零度以下の日に、水槽の温熱ヒーターを入れ忘れて死なせてしまったことがあった。とても可愛がって名前まで付け

ていて、それが自分のせいで死んでしまったことにショックを受けたはずなのに、なんだかあまりよく覚えていないのだった。

もしかしたらそのときには自分は少しおかしくなっていたのかもしれないな、とトオコは思う。トオコは、わりと自分の気持ちに鈍感なところがあって、物事が遠くに過ぎ去ったあとに振り返ってそんな風に思うことが良くあった。

それから何度か、職場や自宅で眩暈や過呼吸を起こすようになり、主治医に相談すると休職一カ月の診断書が出た。大人しく受け取りはしたが、トオコとしては一週間ぐらい休んだら復帰しようと考えていた。

日用品も満足に買いに行けないトオコのために食材を持って家に来てくれた姉は、まるでトオコの気持ちを察知したように、

「大人の夏休みよ、透子。一カ月ぐらいすぐ経つわ」と姉の秋子はトオコのいつの間にか瘦せた背中をとんとんと叩いた。

「うちに来てゆっくり休みなさいよ。一人でいたらどうせ仕事しちゃうでしょ？ 千加子も中学受験のために忙しくしているし、何かと見てくれる人も欲しかったのよ」と言った。

二つしか離れていないのに、姉はときどき母親のようにふるまう。

「そんなに、私は頼りないかな？ 私も、もういい年なんだけどな」と姉に小さく抵抗してみたけれど、「あんたは、自分が見えていない子だからねえ、全然信用できません」と言われ、仕方なくトオコはそれを受け入れた。姉は千加子が低学年の頃に離婚しており、それからさらに強くなったようだ。

荷物置きになっていた和室をトオコが寝泊まりできるように姉と片付けていた時、千加子が言った。

「ねえ、トオコちゃんはあたしの部屋に来たら？」

トオコは勉強の邪魔になるから、とやんわり断ったが、頑固なところのある千加子は、言うことを聞かなかった。

「だって、こんな埃っぽい部屋！ 窓もなくて暗いし、全然ダメ！ トオコちゃん、ね、あたしの部屋を使って」

あたしは、ママの部屋で寝るし、勉強もリビングでするから！ トオコは千加子の強い口調に戸惑って姉を見たが、

「千加子、トオコはゆっくり休むためにうちに来たのよ。ちゃんとさっき言ったこと守っ

て、トオコの邪魔をしないのよ」

本当にあなたはトオコが好きねえ、と呆れたように姉は言った。

姉は、あっさりと千加子の言い分を承諾したので、トオコは千加子の部屋で寝泊まりすることに決まった。

千加子は、実際にトオコがこの家に来て初めの頃は、姉の部屋で寝ていたし、今でも姉がいるときはおとなしく姉の部屋で寝るのだが、姉の帰りが遅いときは、部屋に来て一緒に寝ようとする。トオコも元々千加子の部屋であるのだし、それじゃありビングで寝るね、と抜け出そうとすると、ダメ！　と言って抱きついてくるので、トオコは狭い布団の中で、仕方なく千加子の背中をなでながら横になる。血の繋がりはあっても、他人の吐息を近くで聞きながら眠れるわけがないと思っていたのに、トオコは一人で眠るときより千加子がベッドにいてくれる方が寝つきがいいのに気付いた。

けれど夜中目が覚めると、千加子はベッドの端の方で自分の体を抱きしめて窮屈そうに丸くなって寝ている。

私はともかく千加子は学校があるのだから、ゆっくり一人のベッドで寝た方がいい、トオコは千加子にそう諭すのだが、しばらくは大人しくしていても、やはりこうやって部屋にやって来て一緒にベッドで寝ようとする。一度、千加子が寝ているのを確認して部屋を出て、リビングで布団を敷いてみたことがあったけれど、いつの間にか千加子がやってきて、トオコの隣に滑り込んできた。

千加子は時折子供じみたわがままを言って困らせることもあったが、非常に大人びた子供に育ったというのが、姉とトオコの認識だった。父親がいなくて寂しいのだろうか。それとも千加子はあの不穏な夜を無意識に察して、遠ざけようとしてくれているのだろうか。

「ちいちゃんは、赤ちゃんみたいだねえ」

甘えてくる千加子の頬をくすぐるとびっくりするぐらい冷たくて、トオコは思わず両手で頬を包んだ。千加子はむずがって顔を振ると、代わりに自分の手を押し付けてきた。これをあつためてということらしい。手もひどく冷たい。

外はどれぐらい寒かったのだろう。息を吹きかけながら両手で千加子の手をこする。自分のかさついた手で徐々に温度を上げていく、形よく伸びたほっそりとした指。ほんの少し前は、子供らしいふっくらとした手だったのに、子どもは恐ろしい勢いで成長している。その手がまた、トオコの手を振り払った。千加子が何を望んでいるのかトオコには、分から

ない。千加子に振り回されている自分を感じる。千加子も衝動に任せているだけで何がしたいのかわからないのではないだろうか。

千加子の細い指がトオコのおでこから鼻筋、くちびるまでを指でなぞった。唇の割れ目に、指を潜り込ませるのでトオコは軽く歯を立てた。

夜の闇に濡れたように光る目がきゅっと三日月になったと思うと何が楽しいのか、千加子は声を出して笑った。ああ、私は正しいことをしたのだとトオコはそれを見てほっとした。暗やみの中でトオコを見つめる青白い白眼と黒目のコントラストが美しい。

この生き物は、なんだろうとトオコは思う。

今度は、その手がトオコの髪をまるで動物をブラッシングするときみたいに丁寧に熱心に撫ではじめた。いつのまにかトオコは体の力が抜けて、目を閉じていた。千加子は私をペットかお人形のように思っているのかもしれない。トオコはそう思うことにした。抱きしめていたつもりの千加子の腕がトオコを抱き締めている。千加子の体はいつの間にか湯たんぽのように暖かい。トオコはうとうとし始めた。

トオコの頭が乗っている足がしびれてきたので、千加子はそっと足の位置を変えて枕にトオコの頭を乗せ換えた。それから掛布団をかけて、自分もその中に潜り込んだ。

トオコからはいつの間にか寝息が聞こえる。髪の毛はさわると少しごわついている、枝毛があった。布団の中はトオコの体臭で満ちている。千加子は思わずアクビをした。

今のトオコちゃんは、前までのトオコちゃんと少しちがう。今のトオコちゃんはたんすの奥に突っ込まれたシャツみたいにしわしわだ。でも、それはそれで、可愛い。トオコちゃんは可愛くて可哀そうだ。元氣になって前みたいになんて笑ってほしいけれど、ずっとこのままあたしの腕の中にいてくれてもいいなと、千加子はそんなことを考える。千加子が今よりもっと小さいときから、トオコは千加子にとって特別な存在だった。

千加子が小学校に上がるのと同じころに、千加子の父は単身赴任でメキシコに行って、千加子は母の秋子と二人暮らしになった。父は最初の年は夏とお正月の長期休みに、日本に帰って千加子の家で過ごしていたけれど、次の年から帰って来なくなった。千加子は月に数回、父親とテレビ電話をした。時々その画面の端っこで、髪の毛の長い、足のきれいな外国の女の子が映っていることがあった。

学校にはいきもの係という係があって、小動物の部屋をきれいにしたり、エサをあげたり

するのが役割だ。千加子は、まだいきもの係にはなったことがない。ママはパパのお世話は、もうこりごりだと言っていたから、パパが遠くに行くことになったとき、係を交代することにしたのだろう、と千加子は理解していた。でも、それを両親に問い質さなかったのは、はつきりさせるのがやっぱり怖かったからだ。

千加子が五年生になる年のお正月に、母は父と離婚したことを教えてくれた。千加子は、その時、ソファに座ってテレビを見ていた。千加子は、ふーん、って答えた。それからテレビモニタをチューブに繋いで、セサミストリートを再生させた。急にお正月の賑やかな雰囲気が煩わしくなったからだ。

千加子はみんなの人気者で陽気なエルモより、オスカーが好きだ。ひねくれ者のバケツの住人には、どこか親近感を抱く。

テレビ画面をにらみつけるように見ている千加子の頭を母の腕がぎゅっと抱きしめた。母の腕を急に振り払いたくなかったけれど、千加子は我慢した。あたしはもう大人なんだから、ママを甘やかせてあげなきゃね、そうだよね、トオコちゃん。

今は食べられるけど、給食で嫌いなしいたけが出たとき、むかつくことを隣の男子に言われたとき、今は月に一回テレビ電話で会うパパと動物園に行く夢を見たとき、ママが電気の消えたキッチンでお酒を飲んで泣いているのを見たとき、家の電話でトオコに電話した。トオコはいつもワンコールで出てくれて、何も言わなくても、ちいちゃん？ と声をかけてくれた。

どうして、トオコがスペシャルな存在なのか千加子にもよくわからない。もうずっと前から、トオコは千加子にとって大事に大事に宝箱に取っておきたいような存在なのだ。

千加子は昔からあまり泣かない子だった。両親は物心付いたときから、仲が悪くて、ほとんど千加子の前でしかお互い話をしなかった。そんな親を心配させたくなくて、というわけでもなくて、千加子はわりと我が強く泣くことはしなくてもよく癩癪は起こして二人を困らせていた。

泣くというのは負けるというのとおんなじことだと千加子は信じていた。そして千加子は負けるのが絶対に我慢できないのだった。友達とするかけっこでも、ボール遊びでも、たわいないゲームでも。けれど、数少ない千加子が泣いた記憶にはいつもトオコがいる。あれはパッションピンクのランドセルが届いたときのことだ。千加子は、ピンク色が好きじゃな

い。まだ、青みがかったピンクで、さらに差し色程度なら許せる。けれどピンク色のスカートとか蛍光ピンクの靴とかパッションピンクのランドセルとかは、我慢できない。

買ってくれたのは、祖母だ。千加子はミントグリーンの色がいいと言ったのに、そんな女の子の色じゃないといってピンク色のランドセルが送られてきた。宅配便の段ボールを開封して、呆然としている千加子に、母は、

「ばあばだって、悪気ないのよ。それに千加子には緑色なんて似合わないわ。ピンクの方が可愛いわよ」と無神経に言った。母としては、慰めようと言った言葉だったかもしれないけれど、千加子はその言葉に傷ついた。

ぎゅっと唇をかみしめたけれど、涙が出るのをこらえられなかった。眠くて機嫌が悪かったのもあったかもしれない。母が自分に味方してくれないのも腹が立ったし、ピンクが嫌いで緑色が好きな自分を否定されたような気がして悲しかった。それにカタログを見て、トオコちゃんと一緒に決めた色だったのに。

そのとき、なぜトオコがいたのかは覚えていない。トオコは泣いている千加子を抱き上げて、お散歩に行ってくるねと母に言って、外に出た。それから、何も言わずに家から近くの公園まで、公園から今度通う学校まで、それから近くに住む豆しばを飼っている家の前まで来て、外から犬を眺めた。小学校に上がる前の千加子の体重は二十キロは超えていたと思うのだけど、千加子を抱き上げる腕はとても力強かった。犬は、目を閉じていたけど、トオコが千加子を抱いたまま近づくと、わかってるよというようにしつぽを振った。しばらくして、二人は家に帰った。

泣くのが嫌いな千加子がどうしても泣いてしまう行事が、花火大会だ。お盆の期間は仕事のないトオコは、その間、千加子の家に泊まりに来てくれた。母はお盆も仕事だったから、トオコがいろいろなところに連れて行ってくれた。プールとか映画館とかちよっと離れたショッピングモールかなんかに。花火大会はちょうど、お盆休みの最終日に開催されていたから、千加子は花火を見終わった後、どうしても泣いてしまう。千加子が泣くとトオコはおろおろして、一緒に泣きそうな顔になるので、千加子は頑張って笑顔を作った。トオコが自分の家に帰るのが寂しくて仕方なかった。

顔の美醜で言えば、千加子の母の方がきれいだ。でも、千加子はトオコの容姿を気に入っている。トオコは、少し太っていて、今はだいぶ痩せてしまったから、早く元に戻って欲しいと思っている、くつついたときに肌がもちもちして柔らかくて気持ちがいい。奥二重の目

は少し眠そうに見える。声は高くもなく低くもなく、少し鼻にかかっている。

トオコがちいさく、ごめんなさい、と謝っている。顔を覗き込むと、目は閉じられていたし、寝息がするから寝言のようだった。目の下が少し濡れている。それを千加子は舌をのばしてなめとってみた。そのとたん、お腹の下の方がぎゅうとなった。大きな声を出して転げ回りたいような、うずうずした気持ちだ。千加子は自分の腕を噛んでそれに耐える。その衝動にはまだ名前がない。でも、それも時間の問題だと千加子はきちんと分かっている。